



-第4話 「No music、No life！」パートⅡ-

「対応のバリエーション」は、私たちが仕事で出会う様々な「対応」場面をロールプレイで再現し、いろんな対応の仕方を試してみて、感じたことを自由に話し合おうというワークショップ式体験学習です。ゲームみたいな感覚でみんな楽しんでながら、実は、その中から何か日常の業務に役に立つものを持って帰っていただけたらと思っています。（「そだちと臨床」研究会主催 対応のバリエーション勉強会のお知らせより）

支援の資源としての音楽について、個人的なことを書かせていただいています。しかし、個人的な経験でありながら、世代や地域、ある時は人種や国家なども飛び越えて存在するのがmusicでありましょう。でも、それが無くても人は死ぬことはないのが音楽でもあるわけです。災害であり、戦争であろうとも、何かあるとどこかで議論になるのが、「こんなときに、音楽が何の助けになる！」「非常時には、エンターテイメントなんてなんの役にも立たん！」なんていう説話です。その通りでもあり、そうではないというのが私の心情というか感覚です。音楽が聴くべき存在であるとか、こういう音楽を聴くべきであるとか、言い出した途端にその魅力や効力は薄れていくのでしょうか。あえて言うのなら、音楽は空気みたいなものではないでしょうか。普段から意識して呼吸している人は、そんなには多くはないでしょう。でも、人間、空気を取り込まなければ、確実に死にます。次はそんな空気のようなザ・ビートルズの話。

1.音楽はザ・ビートルズである

やはり、なんと言っても音楽における私の中心点はビートルズです。ローリングストーンズでも、ボブ・ディランでもないのです。時代的にストーンズやディランも確かにしびれたアタシでした。しびれたなんて昭和。しかし、どんな音楽もミュージシャンも、ビートルズ以降はビートルズが居てそこを基点として、それぞれをそれぞれとして取り込んできたと思います。不滅の原点です。

ビートルズのすごいところは、懐メロにならないところでしょう。どんな場所でどんな状況で耳に入ってきて、しばし聴いてしまう音楽です。知らず知らずに、わたしの中にある認知と差別化のスイッチを押してくるのです。また、世代間のハードルも軽々と越えてくる音楽だと言えるのではないのでしょうか。音楽における世代間差は、それ自体楽しいわけですが、ビートルズは軽々とそのハードルを越えてくるなと思います。

かつて思春期の只中にあり、話題作りにも事欠いていた息子との会話。「おまえ、どんな音楽すきやねん?」「う〜ん(怪訝げみに)、オアシスかな。」「(名前ぐらいは知ってる、モンスターバンドらしいけど、当時は聴いたことまだなし)あー、いいよね!イギリスのね!」「へー、知ってんの(やや柔和なかんじへ)第2のビートルズって言われてる」「えー、ビートルズ知ってんの!!ビートルズに第1も第2もないと思うけど。ビートルズのアルバムで聴いたことあるのは(安心と余裕)?」てな具合です。

ビートルズの衝撃というのは、よく日本のミュージシャンがビートルズとの出会いを語る時に最初のギターのアイントロを聴いた時にカミナリに撃たれたようなとか、その音楽を聴く前と聴いた後の世界の色合いが違って見えたとか、割りと同様のことを語っているのを見かけます。私はミュージシャンではありませんが(当たり前じゃ)、同じ体験をした記憶はあります。ちょうど小学校の卒業前か、中学に上がる前の春休みあたりかと思うんですが、1971年。1970年が大阪万博で、そのあたりにビートルズも解散してますから、ビートルズを認知した時には、ビートルズはもういなかった、でも気配は大いにあった世代でした。友だちの家で聴いたEP盤のレコード(あ〜レコードがこんなに復権するなら、処分するんじゃなかった〜)か、家で聴いてたラジオからか、定かではありませんが、「All My Loving」ですわ。「くろ〜じょらい、あんだ〜、きすゆ〜」の歌い出しを聴いた瞬間は、たしかに世界が色を変えました。そこが、もしかしたら、私の思春期の始発駅であったのかもしれない。ビートルズの音楽

やビートルズの在り様は、単なる音楽というジャンルを越えて影響を与えてきたのだという視点は、執筆者@短信でも取り上げた「ビートルズの革命」(NHK『映像の世紀 バタフライエフェクト』)からの受け売りですが、決して自分の中になかったものではありません。

ビートルズの影響がなかったら、更にビートルズが存在しなかったら、世の中はどうなるのか?正確には主人公しかビートルズのことを知らない世界に迷い込んだらというパラレルワールドの映画が2019年に公開された「イエスタデイ」という作品でした。映画の作りの細かさと、主人公の歌のうまさにぐいぐい引き込まれました。なにせ主人公とあと何人かしかビートルズの存在を知らないわけで、主人公が覚えているビートルズの曲を彼の作品として、演奏しスターダムにのし上がっていくんですが、「ちがう、これは俺の歌じゃない。ビートルズのだ!」という葛藤が生まれ...という話だったのですが、ビートルズ好きなら尚更のこと、あんまり知らなくても、一見の価値あります。ビートルズを知らない聴衆がビートルズの歌を聴き、ぶったまげる感じが、ちょうどビートルズを聴いて雷に打たれた頃の自分を思い出してしまいました。あと個人的には映画に出てくるジョン・レノンのそっくりさん加減(特殊メイクですが)にこれもまた、たまげてしまいました。

ビートルズの話、ビートルズからの意識無意識の影響、まつわる友人たち、話し出したらきりがないので一旦終了とします。最後に一つだけ。息子とビートルズの話に触れたのはもう何年も前のことでした。もちろん、それからビートルズについての話を

そんなにした記憶はない。4年前に私も還暦を迎えたのですが、息子らと娘からのプレゼントに赤いちゃんちゃんこならぬ、ビートルズの刺繍の入ったTシャツをもらったときは、なんでビートルズなのと嬉しいより、ちょっとびっくりしてしまいました。親父がビートルズファンなの知ってたんだ、そっちの方が先に来ました。その「アピーロード」というアルバムのジャケットの4人をモチーフにした刺繍入りのTシャツは、ちょっと縮んではしまいましたが、大事にタンスにしまってあります。

2. 音楽は派閥である。

「派閥」という言葉の響きは、昨今は特に悪いばかりです。「裏金」「キックバック」「闇献金」、まあ、政治における金のイメージばかりですが、それは置いて、ここでは音楽の好きなジャンル、特定のミュージシャンの話です。今でいう「押し」ですね。自分の好きなジャンル、更には、好きなミュージシャンについて語り合うのは、今も昔も至福の時間であると思います。もっとも、私のようにFMラジオがその最大かつ広域にわたる情報源であった時代と現代のSNS世代を比べる事すらそもそも問題があるかもしれません。しかしながら、「そうそう」「あれあれ」「おんなじやな～」なんて好きなジャンルの音楽話をしてる時の共有感や、そんな話相手の人格すら“良いやつ”に感じてしまう、これは、今も昔も変わらないような気がします。

で。思い出すが、何でも「三大〇〇」という言い方です。音楽の世界にもありますよね。いったい自分はその三大のうちで何を推すのか、当時はけっこうな選択だった

ように思います。自分のセンス、推した理由、推したことによってどう見られるのか大問題であり楽しみでもあったように今となっては思います。三大ギタリスト(ジャズやクラシック界版もあるでしょうが、ここではロックとします)とえば、エリック・クラプトン、ジェフ・ベック、ジミー・ページとされてます。どうやらこうした命名は、レコード会社の商業戦略の一環だったようですが(ウキペディア調べ)、高校生あたりの自分は他のギター好きの奴との話題はもっぱらこれでした。なんとなく好きでいいのですが、「どこがどのように好きか？」ということを確認に答えられると、そのコミュニティでの評価が爆上がりするのです。今思えばかわいい話ですが、今でも思い出せば楽しい話です。クラプトンでしたね、私は。といってもクラプトン全部を聴いていたわけではなく、「いとしのレイラ」のあのイントロ、たまらんよな～。クラプトンは弾くのが早すぎて見えないから、逆にゆっくりに見えるからスローハンドっていわれるらしい)などと小ネタを挟むと、「あいつは音楽を知っちゃう(“わかっている“の大分弁)」と見られるのではと期待していたわけです。実際は、ジミー・ページもジェフ・ベックも好きでした。レッド・ツェッペリンの時代のジミー・ページの切り裂くようでありながら技巧的なリードギター、今でも時々聴きます。かといって昨年お亡くなりになられたジェフさんのギターもいいですよ。ジェフは、ピックは使わず指弾きだったんですね……(#^_^#)。という具合に、当時は当の音楽を聴かずに何時間でもこんな話のできた記憶があります。

音楽に関しては私には派閥はありません。

何でも聴きます。もちろん、日々のあるいは年間のヘビロテはあります。でもどんなジャンル、どんなミュージシャンの音を聴いても、どこかしら良さを感じられます。それは私の長所だと現在は思い至っています。まあ、節操がないわけです。だから、前回からの話を読んでこられた熱心な私の読者さま（おるんかい！）の中には、宮井さんて音楽好きって言いながら、ビートルズを中心としたロックミュージックが一番好きなのねと思われるかもしれませんが、実際は何でも聴きます。

実はロックより私の身となり血となってきたのは、フォークです。日本のフォークですね。海外ではというとボブ・ディランというお方がおられて、この方はビートルズと並びロックともフォークともジャンル分けできない「ボブ・ディラン」というジャンルですからここでは置いておきます。そんな私のフォークの系譜をひとくぐり。

世代論ではないですが、私の世代ってビートルズにしても気づいたときには解散してましたし、フォークについても反戦フォークやカレッジフォークといったブームも過ぎ去りし後といった感じでした。ちょうど1960年代後半から70年代初め、やはり中学校に上がる前でしょうか。友だちの中には岡林信康という人がフォークの第一人者だとかなんかの雑誌から情報を得てきて、アルバムを購入してファンになるのもいたりしてました。一方でチェリッシュとかトワエモアとか可愛げで美しげなディオもいたりして、フォークとは何ぞやと子どもながらに疑問に思う日々もありました。この時に彗星のごとく現れたのが、かの吉田拓郎氏でした。「結婚しようよ」です。「そ

うか、フォークってこんな日常の事歌うんだ」「そうか、髪が伸びたら結婚するんだ」「なんか俺もギター弾きてー」そんなきっかけで親にねだってフォークギターを買ってもらったのが中1の2学期あたりだったと記憶しています（このあたりの時系列はだいたいいい加減ですが、誰にも迷惑をかけていないと思いますのでご容赦を！）吉田氏のすごいファンだったかと言いますとそうでもなくて、同時代の井上陽水の方が当時はファンだったように思います。フォークって言われるものもニューミュージックと呼ばれ、今ではJポップと言われるようになりました。ほんとにたくさんの歌を聴いてきて他にもたくさんのお気に入りはいるのですが、吉田さんは外せません。

更にもう一人あげるとすれば、中島みゆきでしょう。大学1,2年の時にはまり京都公会館（現ロームシアター）のコンサートに出かけたこともありまして。みゆき姉さんにはまるきっかけは、「ホームにて」という楽曲でした。これは中島みゆきの初期の名曲のひとつで、故郷を遠く離れて、帰郷を恋焦がれるけれども、なぜか帰りの列車に乗れない、そこには帰れない理由があるのでしょうか。そんな歌です。当時の私には故郷に帰れない理由もないし、盆暮れには必ず帰っていたのですが、歌の心情に自分を重ねて酔ってみる、そんなことをして主人公になってみるというようなことをしてました。だいたいみゆき姉さんの歌はフラれたときに自虐的に聴きこむといったタイプの曲と、「時代」や「地上の星」といった応援歌タイプの曲の2タイプがあるっていうのは、巷でよく言われていることですよ。私が好きだったのは、初期の中島さんかなと思

ます。

さて、この両巨頭が共演する楽曲が現れ、ユーチューブで見て、しばらくその動画ばかり見ていたのが「永遠の嘘をついてくれ」です。初めて見たときは鳥肌もんでしたね。御二人とも楽曲提供は、たくさんされているので、中島さんが吉田さんにこの歌を送ったというような裏話にはびっくりはしません。しかし、ライブで同じステージに立つことが想像しにくいぐらい主張的な若かりしときのイメージが御二人にはありましたので、聴き手にはより衝撃的でした。歌唱後の吉田さんのMCにもあったように「お互い歳を取って丸くなったんだね。中島さんも若いときは嫌な奴だったんだ（笑）」というくだりは逆に、同じステージに立つ二人の姿を、たとえYouTubeであろうとも拝見できたことは「生きててよかったなあ」という感慨に結びつくものがありました。

3. 音楽は多様性である。

ジャズも好きなんです。しかし、ジャズについては奥手でした。クラシックと同じように理由は「わからん」という一点。じゃあわかるってどういうことよという話になりますが、要は「難解そうに感じる」という誤解でしょう。一旦刷り込まれたイメージはなかなか改変しがたいものです。ジャズは、わからない、暗い、難しい、ややこしい、といった一方的なイメージを押し付けてずい分遠ざけていた時期がありました。うちの奥さんの方がジャズ好きでその影響から徐々に誤解が取れ、いつの間にか私の方がジャズ好きになっていった次第です。

これほど多様性に富んだ領域はないんじゃないでしょうか？私の理解から言います

と、「ジャズとは、その人がそれがジャズだと思った時点で、それはジャズである」ということです。あくまで私論です。「真夏の夜のジャズ」という第5回目のニューポート・ジャズ・フェスティバルというコンサートのドキュメンタリー映画があります。ジャズ好きならみんな知っているような有名な映画ですが、調べたら1959年公開となっていて、私の生まれた年なので、ずい分古い映画ですが、今見てもおしゃれな映画です。このフェスにチャック・ベリーが登場するんです。チャック・ベリーと言えば有名な（この映画が製作された時点ではどのくらい有名だったのかは知りませんが、後出のビートルズにも多大な影響を与えています）ロックンローラーです。私がかつて一番有名なのは「ジョニー・B.グッド」です。これも映画「バックツリー・ザ・フューチャー」の主人公であるマイケル・J・フォックスがダンスパーティーのステージでガンガンにギターを弾きまくるあれです。だから、ロックンロールなんです。その当時は若造であるチャックを登場させても、ジャズというフィールドは痛くも痒くもないけんねという懐の深さを感じました。その見解はいまに至っても変わりません。

もう一つジャズのいいところは、スタンダードと言われる曲を手を変え品を変えいろんなミュージシャンが演奏することが多いということ。同じテーマでも演奏家によって全く違う、その違いを楽しむけど、もと歌も知っている。これは驚きと安心感の両方を差し出される感じで、すごくいい。これってクラシックにも言えることですが。ジャズの場合、同じバンドですってというのはなくて、いろんなメンツで入れ替わり立

ち代わり演奏するのが普通なわけです。セッションと言ったりジャムと言ったり、まさに多様性の音楽だと思います。ビートルズのジョン・レノンはソロになってから「イマジン」という楽曲で「夢想する先に平和な世界がある」と歌いましたが、ジャズが至る所で演奏される世界はきっと今より平和だと思います。そういう意味では、ジャズの衰退が言われている近年は世の中は不穏になっているといえるのかもしれませんが。

4. レクイエム

音楽を聴いていると「また、亡くなった人の歌を聴いてる！」と娘から陰口を叩かれることがあります。実際亡くなったのをきっかけに、聴きなおし、そのまま聴きこむことはよくあります。亡くなったミュージシャンなら誰でも聴くというわけではありませんが、一応チェックはします。昨年から今年にかけては特に多くのミュージシャンがなくなったように思います。生前はそれほど聴いていなかったのに、昨年からずっと聴いているのが KAN ちゃんです。もちろん「愛は勝つ」という大ヒットのあるミュージシャンですから生前から知ってはいたわけです。なぜ、他の楽曲をもっと聴いてこなかったのか、残念でなりません。歌はもちろんですが、ピアノのうまさ、クラシックの素養を感じずにはられません。ビートルズやビリー・ジョエル、スティーヴィー・ワンダー風というのではなく、そのものをパクリながら絶妙にアレンジして、自分の楽曲に取り込んでみせるということもいとも簡単にやっておられます（音楽理論的なことにも精通されていたんではと素人ながら思います）。何より KAN ちゃん自身が大の

音楽好きだったんだろうというのが垣間見れてそこが嬉しくなるのです。詩の内容は基本的にはラブソングですが、切り取る風景が独特で、おしゃれでありながら普遍性を持っている気がします。そんな中で「世界でいちばん好きな人」という歌があります。ラブソングですが、よくできた反戦歌だと思います。自分と彼女との平和な普通の日々と、遠くの戦争を対比させながら、漠然とした不安の中で「せめて僕らは互いを許し生きよう」と穏やかなメロディに乗せて歌ってくれます。さらっと聴くとラブソングにしか聴こえませんが、普通の人々の深い祈りや願いが込められているような気がします。いまこの世情不安が顕在化している世の中でこそ聴かれるべき歌だと思います。

音楽視聴の第二黄金期を迎え、昨年は自分史上一番コンサートを見に行った年になったように思います。ジャクソン・ブラウン（歌声が少しも古びてないのでびっくりした！）を皮切りに、南佳孝（京都文化博物館での弾き語り、特にギターと南さんのボーカルとホールの音響が相まって至福の時間でした！）、そして難波ブルースフェスでは、お馴染みのキーボー（上田正樹）や木村さん（憂歌団の木村充輝）はもちろんのこと、ComplianS の佐藤タイジと KenKen には新たなファンとなりました。そのコンサートでの出来事ですが、三宅伸治が Spoonful というバンドを率いて演奏始めました。三宅さんは、あの我が永遠のロックアイコン忌野清志郎のバックで長らくリードギターを弾いていたミュージシャンなんです。当然、清志郎の楽曲もやってくれるのは織り込み済みだったのですが、

「JUMP」の特徴的なギターのイントロ、その後続く「夜から朝に変わるいつもの時間に～」と三宅さんが歌い始めると、涙が流れてきたんですわ。音楽を聴いて感極まることはあっても、涙が自然と流れるなんてことは、初めての経験とっていいかもしれません。その時は、よくわからなかったけど、清志郎のことを思い出したというより、「今この場でこの音楽を聴けて、更にはこうやって生きててよかったよな、オレ」というような高揚感であったような気がします。

これからも、息をするように音楽を聴き、勇気づけられながら、生きていくのでしょ
う。完。

